

---

# 錯覚

現地 晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

錯覚

### 【Zマーク】

Z2689M

### 【作者名】

現地 晶

### 【あらすじ】

偶然見つけた夫の秘密。

でも私は、この生活を壊すつもりも、夫と別れる気も無い。

一度失った女を、俺は再び手に入れた。  
優しく美しい、愛しい愛しい俺の妻。

暗くてイタイ話です。苦手な方はご注意下さい。

## 妻1（前書き）

この作品には、アブノーマル（ストーカー風）な部分があります。  
暗くてイタくてキモくて死にネタもある話です。  
嫌悪を感じる方は、お読みにならないで下さい。  
苦情は受け付けいたしません。

「行つてらつしゃい、あなた」

笑顔で会社に行く夫を見送る。

「ああ」

素つ気ない返事をして、夫は出て行く。  
私は玄関の鍵を閉め、ベランダに走る。  
すると、駅に向かう夫の姿が見えるのだ。  
じつと見ていると、不意に夫は振り向き、私に軽く手を振る。  
私が手を振り返すと、夫はまた前を向き、足早に去つて行く。  
平日の朝、まるで決められているかのように、二人はこれを繰り返す。

そして、今日は火曜日。

私は夫の部屋に入り、クローゼットを開ける。  
その奥に、目的のものはある。

積まれた荷物の一一番下。

几帳面に整理整頓されている物を一つずつそつと動かし、隠されている箱に辿り着く。

その箱を部屋の真ん中に持つて行き、蓋を開けた。

現れる、沢山の写真。

その一枚を手に取ると、若い頃の夫と、その隣で微笑む私にそつくりな女。

ビリビリビリ・・・。

写真を破る。

細かく、細かく。

やがて夫の顔も女の顔も分からなくなると、私は箱を元通りに隠し、その上に荷物を置いていった。

クローゼットの扉を閉め、私は写真だった物を掌で包み、夫の部屋を出る。

キッチンに行って、握っているゴミを、そこににある大きなゴミ袋に捨てた。

袋の口をギュッと縛つて左手に持ち、玄関ドアから廊下に出て、ノロマなエレベーターを待つて下に行く。

足早にマンションのエントランスを抜けて、ゴミ捨て場に袋を置いた。

『可燃ゴミの収集は火曜日と金曜日です』

貼り紙に書いてある言葉に、口角を上げる。  
ええ、知っているわ。

「あら、坂本さん。おはよっ」ぞーます

掛けられた声に、私は笑顔で振り向く。

「おはよっ」ぞーます。今日も暑くなりそうですね

「本当に。いつも毎日暑くちやんや嫌になるわよね

「そうですね」

たわいもない会話をして、部屋に戻る。

洗濯物を干して掃除して、ワイドショーを見て・・・そして夫が帰つて来る。

「お帰りなさい」

「ああ」

素つ気ない返事をして、夫は自分の部屋に入る。  
私はリビングに行き、食事の準備をして夫を待つた。  
そして一人で食事をして、順番にお風呂に入つて、一つのベッドで眠る。

「おやすみなさい」

「ああ」

背中を向けて眠る夫を見つめながら、私は眠りについた。

それを見付けたのは、偶然だった。

『掃除は自分でやるから、入らないでくれ』

そう言っていたのに、その日私は掃除機を片手に夫の部屋に入つた。

下手な鼻歌なんて歌いながら、隅々まで綺麗にしていく。  
勿論クローゼットの中も・・・。

「あ・・・っ」

そしてその時、うつかり端の方に置かれた荷物に、掃除機のヘッジを当ててしまつたのだ。

「あー、しまつた」

崩れてしまつた荷物を元通り戻そうとして、ふとそこへ、まるで隠されるように置かれた箱に気が付いたのだ。

まさかエツチなDVDでも入つているのだろうか?

「まさか、ねえ」

真面目な夫がそんな物を持つているとは思えないが、もしかして・  
・。

いけないとは思いつつ、箱を部屋の真ん中に持つて行き、そつと蓋を開けてみる。

「え!」

一番に田に飛び込んできたのは、微笑む自分。

しかしよく見ると、それが自分ではない事に気付いた。

「これって・・・」

知つてゐるが、知らない女。

今は亡き祖母の家の仏壇に、一枚だけ飾つてあつた写真。

何故？

微笑む女の横で、笑う若い夫の姿。

何故？

私は夫のこんな顔、見たことが無い。

「・・・・・」

知り合いだつた？

ならば、隠す必要など無いではないか。  
箱の写真を手に取る。

一枚一枚見ていくと、キスをしている一人の姿があつた。

何故？いや、そういう事なのだろう。  
でも理解出来ない。

「・・・・・」

私はその写真を、ビリビリと破いた。  
そして思い出す。

夫と初めて会つたのは、何処だつたか

。

「・・・・・」

細かくなつた写真を、掃除機で吸い取る。

箱をクローゼットに元通り戻した。

・・・素つ気ない夫がたまに見せる、優しさが好きだ。  
この生活を壊す気も、夫と別れる気も、私には無い。

夜 。。

ベッドの中で、夫の背中に手を触れる。

「ねえ、・・・好き」

あなたが好き。

夫は振り向き、私を見た。

私・・・?

本当に夫が見ているのは?

それでも・・・。

夫はその夜、私を優しく抱いてくれました。

## 夫1

初めてだった。

付き合つたのも、抱いたのも。

由里子は俺の初めての女だった。

出会ったのは大学。

俺の一目惚れだった。

すらりとした身体、小さい顔、大きな瞳

中西由里子はとても美人だ。

彼女の姿を目で追う俺を、高校からの親友である雅樹は笑つた。  
「気になるんだつたら、声掛けてみろよ」

しかし社交的な雅樹と違い、奥手な俺はそれが出来なかつた。  
第一、俺みたいな冴えない男に、彼女が振り向いてくれるとは思えなかつた。

「見ているだけで、いいんだよ・・・」

そう言つ俺の頭を、雅樹はノートでポンポンと叩いた。

「しょうがねーな」

そう言いながら、ある日突然、雅樹は由里子を俺の前に連れて來た。

「上手くいつたら奢れよ」

俺の耳に囁いて、雅樹は去つて行く。

「あ・・・」

果然と雅樹を見送り、それから由里子を見ると、彼女は笑つていた。

「ねえ、話つて何？」

「え・・・!」と、その・・・」

「もしかして『付き合ひて下さい』とか？」

二十一

目を開く俺に、彼女は「っ」と吹き出しだ。

「何驚いてるの？面白いえーと……名前なんだけ？」

「あ、備え。」  
坂本篤

「元」

付き合つ? それも彼女の方から言われるなんて . . . 。

「あ、あの・・・」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

両手を腰に当て、少し怒ったように言ひ彼女に、俺は圧倒された。

ええ・・・と、お願いします・・・」

そうして実にあつたと、由里子との交際は始まった。

## 夫2

由里子との交際は、順調だった。

付き合う事が決まった次の週末に、初めてデートをした。何処に行つて何をすればいいのか分からぬ俺は、雅樹に教えてもらつた通りのコースを緊張しながら歩いた。

そんな俺を由里子は『可愛い』と言つた。

一週間後に初めてのキスをした。

そして一ヶ月後、俺は女の身体を知つた。  
誘つたのは彼女からだつた。

「身体の相性も、大切でしょ？」

そう言つて、由里子は俺を優しくリードして、女の抱き方を一から教えてくれた。  
俺は由里子に夢中だつた。

由里子とのデート費用を稼ぐ為に、バイトをした。  
大学を卒業したら、すぐに結婚したい。  
その為に、勉強も頑張つた。

俺の頭の中は、由里子との明るい未来でいっぱいだつた。

「おい、坂本……」

そななある日、同じ高校出身の寺田が声を掛けてきた。  
寺田とは特別親しい訳ではないが、会えば挨拶もするし話もある、といった関係だつた。

「何？寺田」

「その……、ちょっと話でもしないか？」

「え……？」

そんな風に寺田から言われたのは、初めてだつた。  
俺は戸惑いつつ、寺田に付いて、大学の近くにある喫茶店に入つた。

「何……？どうしたんだ？」

「うん……」

寺田は田の前の「アービーをじつと見つめ、やがて意を決したよう

に話し始めた。

「お前、さ。中西由里子と付き合つてんのか？」

「え……？」

「いや、見掛けたからさ。一人が一緒にいるの」

「デートでも見られたのだろうか？」

一つ先輩の彼女と、大学内で一緒にいる事はあまり無い。

「ああ、付き合つているよ」

「…………」

俺の言葉を聞いた寺田は、眉を顰めて頭をバリバリと搔いた。

「んー……、あのさあ、俺は坂本の事、友達だと思つてるから、  
敢えて言つや。……怒るなよ」

なんだろう？

不穏な気配がするが、俺は取り敢えず頷いた。

すると、寺田は驚くべき言葉を口にした。

「……あの女は、やめておけ」

「…………」

なんだ？何を言つてている？

「中西由里子ってな、『尻軽女』って有名なんだぞ。誘われりや誰  
とでも寝るつて」

「・・・・・」

「お前、知らなかつたんだろ？そんな事。實際俺の知つてる奴も、何人かあいつと寝てるぞ」

「・・・・・」

意味が分からなかつた。

確かに、由里子は俺が初めてでは無かつたが、寺田が言つような女では決してない。

「まあ、その、そういう事だ」

寺田はテーブルの上のコーヒーを一気に飲み干し、溜息を吐いた。  
何がだ？ そういう事ってなんだ？

由里子の事をろくに知らない奴が、何を言つている？

「おい、坂本・・・・、大丈夫か？」

「・・・・・」

俺は立ち上がり、寺田を睨み付けた。

「ふざけんなよ」

一言だけ言つて、伝票を握りしめレジに行く。

「あ、おい！ 坂本！！」

叩きつけるように金を払い、外に出る。

後ろで寺田が何か言つていたが、聞く気は無かつた。

寺田は最低の男だ。

もう一度と、あいつとは関わらない。

俺は憤慨しながら、大学に戻つた。

由里子との交際は、その後も順調だった。

寺田とは、もう田を含わす事もしなかつた。  
時々何か言いたそうにこちらを見てくるが、勿論無視した。

由里子は明るく優しく、最高の女だ。

その由里子を侮辱した寺田を、俺は許す事など出来ない。

俺の机の引き出しには、雅樹が撮った一人の写真が増えていった。

「んー！ほら、もうちょい引っ付けよ」

交際一年目を迎えたその日、雅樹は一人の記念写真を撮ると張り

切っていた。

「もつとなあ、記念写真なんだから、いつもよりベッタリしろよ。

そうだ、由里子、チューしろ、チュー！」

「おい、雅樹！」

たしなめようとする俺の頬を、由里子の手が包む。

「いいじゃない。ねえ、チューしよ」

「ゆ、由里子・・・」

大胆な由里子に、引き寄せられる。

俺と由里子の唇が重なり、雅樹が笑いながらシャッターを押した。

「飲み会があるんだけど、来ない？」

俺は酒が苦手なのだが、由里子に誘われて嫌とは言えない。雅樹と共に居酒屋での飲み会に参加した。

「ビール頼んだ人ー！」

「唐揚げ来たよー！」

由里子はよく気が付く女だ。

彼女の周りには、男も女も寄つて来る。

少し嫉妬しながら由里子の横顔を見ていると、不意に田<sup>た</sup>が合い慌てる。

「おかわりは？」

「あ、じゃあ、ウーロン茶を

「駄目よ、飲み会なのにお茶ばっかり！ちょっとだけ飲も」

そう言って、由里子は勝手に酒を注文した。

「甘ーいカクテルなら、飲めるよ。社会人になつたら、お付き合いで飲む事もあるんだから、練習、練習！」

由里子がコップを俺の唇に当てる。

流れてくる甘い匂いと味、それと由里子の笑顔に、俺はクラクラとした。

「飲めるじゃない！ほらほら、もっと飲・ん・で」

由里子も酔つているのだろうか？

いつもより更に明るい様子に、俺もなんだか笑いがこみあげてきた。

「やだ！笑い上戸？」

由里子のケラケラと笑う声を最後に、俺の記憶は無くなつた・・・

。

小さな話し声で目が覚めた。

頭がガンガンと痛む。

朦朧としながら辺りを見回すと、ワンルームの狭い部屋の床に、俺は寝ていた。

ここは見覚えがある・・・。

ああ、そうか、由里子の部屋だ。

酔った俺を、雅樹が運んでくれたんだな。

そういうえば先程から聞こえる声も、雅樹と由里子のものだ。

痛む頭に眉を顰めながら起き上がろうとした時、一人の会話がはつきりと耳に入った。

「ねえ、早く。もう我慢出来ない」

「でもなあ、篤が居るだろ。今日はマズいって」

「大丈夫よ。起きなって。それにバレたら別れるからいいよ。そろそろ純情じつこも飽きてたし」

「おい・・・」

「三年近くも付き合つてあげただから、感謝して欲しいな。それよつ早くう」

・・・二人は何を話している?

俺の寝ている横の、ベッドの上で、二人は何をしている・・・?

由里子の喘ぐ声と、雅樹の荒い息遣い。

俺は身動き一つ、する事が出来なかつた。



その後も俺達三人は、変わらぬ関係を続けた。

真実を顕らかにして由里子が俺から離れていくぐらいなら、何も知らないフリをした方がましだ。

だがそういう決意をした途端、目にしたくないものが見えてくる。それは例えば、木の影に隠れるようにして知らない男とキスをする姿とか、腕を組んでホテルに入つていく姿とか、電話口から聞こえる男の声とか。

そして、風邪をひいたからと言われてデートをキャンセルされた時、見舞いに行つた俺は、由里子の部屋から聞こえる喘ぎ声に愕然とした。

由里子は俺と別れる気なのだ。

俺が由里子を抱いたのは、もういつだつたのか思い出せない程前だ。

フラフラと自分の住むアパートまでの道を歩いていると、「あー」と言う声が聞こえた。

顔を上げると、寺田が立っていた。

「え、坂本・・・  
「・・・・・」

俺は寺田の横を、俯いて通り過ぎた。

今更なんて言えばいい？

以前のような関係には、戻れない。

寺田とも、そしてきつと・・・・・。

由里子が大学を卒業して、雅樹が大学を辞めた。

「子供が出来たの。父親は雅樹よ」

大学の近くにある喫茶店で、そうあつさりと話した由里子。

「結婚して欲しい」

誰の子供でも構わぬから。

しかし、由里子はそんな俺をケラケラと笑った。

「馬鹿じやないの？」

ジュースを飲み干し立ち去る由里子。

「・・・・・」

俺は伝票を握りしめ、レジに向かつた。

その夜、布団の上に座り呆然としていると、突然激しいノックの音がした。

ビクリと身体を震わせる俺の耳に聞こえてきた声

。

「篤、篤！開けろよ！」

雅樹・・・！？

驚いて立ち上がり、ドアを開ける。

「雅樹・・・」

ベロベロに酔つた雅樹が、そこに居た。

「篤！」

雅樹は倒れるよつに俺に抱き付いてきた。

支えきれずに尻餅をついた俺を、雅樹は強く抱き締める。

「雅樹・・・」

「あの女、ふざけやがって」

『あの女』・・・。

「俺の子供がどうかなんて、分かんねーだろ？ 色んな男とやりまくつてたくせにーなのに、俺の子供だって言い張るんだぜ！」

「・・・・・」

「あーあ、大学だつて後一年だつたのに、やめちまつたし。参つた

な

「・・・・・」

何を・・・言つているんだ！

俺は雅樹を強引に引き剥がした。

由里子を手に入れて、なんの不満があると言つのか。

嫌なら・・・！

「俺に譲つてくれ」

大切にするから。由里子も子供も。

「・・・・・」

しかし雅樹は、唇の端を引き上げて、泣きそうな顔で笑つた。

「お前の、そういうのが好きだ」

雅樹は立ち上ると、背中を丸めて帰つて行く。

「雅樹・・・！」

俺の叫びは、暗い空に虚しく吸い込まれ、雅樹には届かない。

そして一人は、俺の前から去つて行つた。



『働かないでくれ』

夫は結婚する時そう言った。  
だから私は専業主婦だ。

週末

夫の運転する車に乗つて、大型スーパーへ買い物に行く。  
ここで一週間分の食料などを、まとめ買いするのだ。  
私は車の免許を持つていらない。  
うちには自転車もない。

夫はそんなもの必要無いと言つ。

『買い物なら、俺が連れて行く』

だから私は、ゴミ捨て以外に一人で外に出る事がない。

週末

。

夫はまだ明るいうちから、私を求める。

『顔も身体も、よく見たいから』

誰の・・・?

見上げた夫の切ない瞳は、初めて会ったあの時と同じだった。

あれから十年経つた。

由里子が去ったこの街に、俺はまだ住んでいる。  
そこそこの企業に就職して忙しい毎日を送り、あの頃よりマ  
ンションに住んでいる。

色々なものを無くし、色々な事が変わり、でも俺は・・・まだ由  
里子が好きだ。

会社帰り。

疲れた身体を引き摺るようにして歩く俺を、呼び止める声。

「坂本・・・」

立ち止まつた俺の腕が、引っ張られた。

「あ・・・」

薄くなつた頭髪に、でつぶつと出たお腹。

随分と見た目は変わつたけど、それが誰かはすぐに分かつた。

「寺田・・・」

俺が名前を呼ぶと、寺田はホッとしたようにな笑つた。

「今日は出張で、」「ちへ来たんだ

近くの喫茶店に、俺達は入った。

寺田は今、別の街に住んでいるらしい。

「変わつたろ？ハゲデブになつちまつた

笑う寺田の左手の薬指には、指輪があつた。

俺がその指輪をじつと見ていると、寺田は照れたように笑つた。  
「うん。結婚した。もう七年になるよ。こないだ三人目が産まれた

んだ」

「・・・そうか、おめでとう」

ああ、だからこんなに幸せそつなのか。

「お前は・・・」

「独りだよ」

「そうか・・・」

俺達の会話はそこで途絶え、互いにチビチビと珈琲を飲んだ。

「・・・まだ、忘れられないのか？」

不意に聞こえた言葉に、俺は視線を上げる。

「もう・・・忘れてもいいんじやないか？」

寺田は俺の目を真っ直ぐに見た。

「あれから十年経つたんだ。あいつらも、死んじまつたし・・・」

「・・・・え？」

「え！？」

俺はポカンと口を開けて、寺田を見た。

寺田は大きく目を見開いた後、視線を彷徨わせる。

「あー・・・、知らなかつたのか。事故で・・・、三年くらい前だ  
つたかな」

死んだ・・・？

由里子が・・・？

「まさか・・・」

寺田は俯いて、首を振る。

「・・・・・」

信じられなかつた。

由里子が、死ぬなんて。

俺の中には、今でも由里子の笑顔があるところ……。

「どうして……」

その駄目をびりびり捕えたのか、寺田は事故の詳細を語り始めた。  
「車」と、崖から落ちたつて。……無理心中じゅうじゅうかって噂だ。  
なんか、揉めてたらしいし……

・・・無理心中？

「何故……」

「さあ、そこまでは……」

「どうしてだ。一人は結婚して、子供だつて……、子供？

「子供……！」

「ああ、子供は婆さんとこに預けられてたらしくや」

「お前も、わ。もつ充分苦しんだんだ。新しい生活を始めて、い

いんじやないか？」

・・・新しい？

由里子のこないこの世界で、それに何の意味がある。

気まずい雰囲気のまま、俺達は喫茶店を出た。

「じゃあ、な

「・・・ああ

しかし寺田は、一步程歩いたところ振り向いた。

「俺は今でも……、お前の事、友達だつて思つてるよ

ああ・・・。

「ありがとう」

今まで「めん。

寺田は笑つて手を振り、家族の待つ家へと帰つた。

何一つ魅力の無い世界を、俺はそれでも生きている。

由里子の死を受け入れられないまま、時だけが過ぎていく。  
寺田が嘘を吐いたとはもう思わないが、眞実だと信じたくなかつた。

そして子供・・・。

もし一人残されたのなら、今は何処にいるのか、元氣でいるのか・・・。

「・・・・・」

俺は段ボールから、古い手帳を引っ張り出した。

「死んだよ」

電話口から聞こえる、雅樹の父親の声。

夫婦仲は最悪だつたらしい。

由里子は子供をほつたらかしにして遊びまわり、雅樹は由里子に手をあげた。

育てられない子供は、由里子の母親が引き取った。

「飲酒運転だよ。ブレーキの跡が無かつたらしい。運転してたのは嫁の方」

由里子が・・・?

どうして・・・。

二人の間に何が起つたと言つのか。

事故の真相は分からない。

分かつてゐるのは、一人が死んだ事と、子供が生きている事。

「嫁の骨は・・・、あちりに弓を取つてもうつた

雅樹の父親は、俺に由里子の実家の電話番号を教えてくれた。

命日が近付いたある日、俺は意を決して由里子の実家に電話を掛けた。

数コール後に出たのは、予想外の女の子の声。

「はい、中西です」

あまりに驚いた俺は、声が出なかつた。

「もしもしー?」

「・・・・・」

女の子が「おばあちゃん」と祖母を呼んだ。

「もしもし?」

次に聞こえた声は、先程とは違う、少し低い声。

「あの

」

由里子さんに昔世話をなつた者です。

俺がそう言つと、由里子の母親は凄い勢いで話始めた。

好き放題やつて、子供を残して死んだ馬鹿娘と言いながら、由里子の母親の声は震えていた。

「さつさ電話に出たの、あのが由里子の子の『由香里』だよ

やはりそうなのか。

迂闊な俺は、雅樹の父親に、子供の性別さえ聞いていなかつた。  
女の子、だつたのか。

由里子の母親は、自宅の住所や墓地の場所まで俺に教えた。

「よかつたら、来て下さい」

俺は礼を言つて、電話を切つた。

父の顔も母の顔も、憶えてなどいない。  
まだ小さな頃に、私は母の母  
つまり祖母の元に預けられた。

『由里子はるくわなし』

祖母はそう言って、でも私の事は可愛がってくれた。  
だから、両親が死んだと聞いても、なんの悲しみも感じなかつた。

「行つてきます」

ランドセルを背負つて学校に行く。

「由香里ーー今日は早く帰つてくれるんだよ」

「はーい」

今日は両親の命日だ。

少し遠いが、それでも家から歩いて行ける墓地にある墓、そこには  
母の骨が納めてあつた。

『ろくでなし』なんて言つてたのに、母が死んだあの日、祖母は  
声をあげて泣いた。

そして命日や月命日、盆などには、必ず私を墓に連れて行つた。  
でも私には、手を合わせる意味が分からなかつた。

母は私にとつて、生きている時も死んだ今も、他人だつた。

墓に水をかける祖母を、私はボーッと見ていた。

「ほれ、由香里、お供え」

私がビニール袋から取り出した饅頭を、祖母は半紙に載せて墓に供えた。

手を合わせて目を瞑り・・・でも私はすぐに合掌を解き、目を開けた。

祖母の祈りは長い。

この待つ時間が、私には苦痛で仕方なかつた。

何とはなしに周りを見渡していると、ふと少し離れた場所に立つ、スーツ姿の男に気付いた。

墓参り・・・？

でも男は、私をじっと見ている。

変質者には見えないが、もしかしたらそのかも知れない。

「おばあちゃん・・・」

怖くなつた私は、祖母の袖を引っ張つた。

「うん?どうしたね、由香里」

「あれ・・・」

そうして指差した場所に、男は既にいなかつた。

男の事などすっかり忘れていた一年後の命日

。

私はまたあの男に会つた。

手桶に水を汲み、先に墓に行つた祖母のところに持つて行こうとした時、私は躊躇って転んでしまつた。

「痛あ・・・」

擦り剥いた膝の痛みに眉を寄せながら立ち上がりうつとした時、腕がグイッと引つ張られた。

驚いた私が顔を上げると、田を見開く男の顔。

「・・・・・」

男は何故か唇を震わせ、今にも泣きそうだった。

「あ・・・」

視線を逸らし、男は私を立たせると、優しく頭を撫でて去つて行つた。

「・・・・・」

男が何者かは分からぬが、私を見つめる切ない瞳が、とても印象的だった。

その一年後の命日、男は現れなかつた。

由里子の命日。

俺は由里子の眠る地に、車を走らせる。

意外にも俺の住む街から近い場所に、それはあった。

車を駐車場に停め、由里子の母親から聞いた目印を頼りに中西家の墓を探すと、これも簡単に見付かった。

あまりにも呆気ない、そして冷たい対面。

由里子は骨となり、この石の下に居る。

小さな欠片だけでいいから、連れて帰りたい。

そんなささやかな願いさえ、叶わないのだろう。

「・・・・・」

あの時、強引に由里子を連れ去れば、こんな事にはならなかつたのだろうか。

由里子の笑顔と子供の居る家庭が、築けたのだろうか。  
そんな事を考えながら、俺は墓の前にずっと立っていた。

何時間そうしていたのか、気が付けば夕方になつていた。

「・・・・・」

いつまでもここに居られない事くらい、俺だつて分かつている。

また、会いに来る。

心の中で語り掛け、俺は駐車場へと向かう。

その途中、未練がましく振り返った俺は、墓地に向かつて歩いて来る二人連れに気付いた。

大人と子供。

まさか・・・・。

そんな偶然あるのか？いや、今日は命日なのだ。

俺がじっと見ていると、二人は中西家の墓の前に立つた。

やはり・・・そうなのか。

遠くて顔は分からぬが、あれが由里子の子供・・・。

由里子を連れ去る力があれば、あの子が俺の子になつていた。

由里子の子は、墓に手を合わせ、しかしすぐにそれをやめて周りを見渡した。

「・・・・・！」

目が・・・合つたような気がした。

由里子の子が、祖母の袖を引く。

俺は慌ててその場を去つた。

よく考えれば後ろめたい事をしている訳ではないのだから、逃げる必要など無く、由里子の母親や子に挨拶をしても良かつたのかもしない。

しかし何故か、俺はその時逃げなければいけないような気がしたのだ。

時々、俺は由里子の墓に行つた。  
仕事が終わった後、ふと由里子に会いたくなると、車を走らせた。  
そして、花を供える事も、手を合わせる事さえもせず、ただただ  
墓の前に立つていた。

## 一年後の命日

仕事を早く切り上げ、俺は由里子の墓に向かつた。

駐車場から墓地へ行つた俺は、そこに既に先客がいる事に気付く。  
由里子の母親・・・。

そうか、来ていたのか。

子供は一緒にいないのかと周りを探すと、手桶に水を汲んでいた。

見てみたい、由里子の子の顔を。

俺は子供にそつと近付く。

子供は蛇口をひねつて水を止め、手桶をグイッと持ち上げた。  
重いのか、よろめいた・・・と思つたら、辺りに水をぶちまけな  
がら、転げる。

「――」

膝を押さえるその姿に、俺は思わず子供に駆け寄つた。

「痛あ・・・」

怪我をしたのか！？

腕をグイッと引っ張ると、驚いた子供と田が合ひつ。

「・・・・・」

・・・由里子が、居た。

生きていた。

由里子は子供の中で、生き続けていたのだ。

幼くはあるが、由里子と同じ顔。

俺を見つめる大きな瞳。

俺は由里子を見付けた。

零れそうな涙を堪え、子供を立たせて頭を撫でる。  
柔らかい髪。

抱き締めたい気持ちを必死に押さえ、その場を離れる。  
あの子の名前は・・・、そうだ『由香里』だ。  
名前までそっくりな二人・・・。

また、会いに来る。

由香里の中の由里子に。

それから時々、俺は由香里を見る為に、車を走らせた。

可愛い由香里

。

五年生の夏休み。

アイスクリームを食べながら、友達と公園で遊ぶ由香里。  
暑いのに、元気だ。  
しつかり帽子をかぶらないと、熱中症になるぞ。

六年生の秋。

由香里は運動会で、リレーの選手に選ばれた。  
スラリとした手足を懸命に動かし、一人追い抜かして一位になつた。

友達とハイタッチしながら、眩しい程の笑顔を見てくれた。

中学校の合唱コンクール。

美しい高音を響かせ、ソロパートを歌う由香里。  
緊張しているのか、頬が少し赤い。  
それがまた、可愛い。

中学卒業。

友達の涙をハンカチで拭いてあげる、優しい由香里。  
記念写真を撮ろうと、何人もの生徒が由香里に群がる。  
その中に男子もまざっていたので、少々嫉妬してしまった。

高校受験。

由モから歩いていける距離の高校に合格する。  
不安そうに自分の番号を探す姿に、俺もドキドキとした。  
合格おめでとう。

綺麗な由香里

。

高校生になつてから、急に由香里は大人びてきた。  
益々由里子に似て、まるで双子のよつだ。  
周りの男共の視線を集めてしまう、由香里が心配だ。

告白されて居るので田撃してしまった。

断つたようで、ホッとする。

しかし、またいつ同じ事が起ころか分からない。  
変な男に引っ掛けたらどうしよう。  
不安になる。

由里子の母親であり、由香里の祖母が入院した。  
かなり悪いのだろうか？

病院から出た由香里は、肩を落としている。  
一人暮らしになるが、大丈夫だろうか？  
もつと頻繁に様子を見なければならない。

学校、家、病院の往復。

由香里はかなり疲れているようだ。

友人と遊ぶ事も、すっかり無くなってしまった。  
力になつてやりたい。

何か近付くきっかけがあれば良いのだが・・・。

祖母が、入院した。

裕福ではないが、それなりに生活は出来ていた。  
だがしかし、もつと切り詰めていかなくてはならないのだろう。

高校三年生の私は、少し前まで受験生だった。

先生はしきりに『勿体ない』と言うが、進学は諦めた。

一流大学に行ける頭がある訳ではないのに・・・。

先生が求めるものは『合格』だが、私が求めるものは『生活して  
いけるだけのお金』なのだ。

病院の祖母を見舞つた帰り、私は力なく公園のベンチに座る。

『手術』

祖母が傷付く事よりも、お金の心配をしてしまう私は、酷い孫だ。  
保険はどうなつていたか？

通帳に後いくら入つているか？

特別な理由があれば、学校公認でバイトが出来る筈だ。

「・・・・・」

一人になるのは嫌だ。

両手で顔を覆う。

真夏に近い、照りつける日射しにクラクラとする。

「Jの先、どうしようか？  
どうすれば良いのか・・・。

その時、不意に頭上から声が聞こえた。

「気分が・・・悪いのか？」

顔を上げると、そこに見知らぬスース姿の男が立っていた。

「ちょっと、待っていて」

男はそう言つて、近くの自販機でジュースを買って戻ってきた。

「飲めるか？」

「・・・・・」

渡された数本のペットボトル。

・・・勿体ない。

家に帰ればお茶があるから、わざわざ高いジュースを買つ必要など無かつたのに。

親切をこんな風に思つてしまつ私こそ、病氣だ。

「ありがとうございます」

礼を言ひ、キャップを開けようとするが、力が入らない。

「貸して『じらん』

私がジュースを渡すと、男はキャップを開けてくれた。

「・・・ありがとうございます」

喉を流れる甘い液体。

そういえば、ジュースなんて久し振りに飲んだ。

「美味しい」

呴いた私に、男は目を細める。

「良かつた。気分が悪いなら、送つて行くよ。家は何処?」

「あ・・・、その、大丈夫です」

見知らぬ男に付いて行く程馬鹿ではない。

「そう、じゃあ」

去つて行こうとする男に、私は慌てて声を掛けた。

「これ、ジュース・・・!」

「あげるよ

「・・・・・」

こんなに?

でもまあ、くれると言つのだから、もうひとつおこう。

太つ腹な人だ。

私はジュースを鞄に突っ込み立ち上がる。

・・・重い。

だが置いて行くなんて勿体ないので、気合いを入れて肩に鞄を掛けて、駅までの道を歩いた。

日曜日

。

昼前に、由香里は病院に行く。  
出口近くの椅子に座って待っていると、一時間後にグッタリとして戻ってきた。

・・・お婆さんの具合が、悪いのだろうか？

距離を開けて追い掛けると、由香里は近くの公園のベンチに座つた。

気分が悪いのか・・・？

俺は思わず、由香里に駆け寄つた。

「気分が・・・悪いのか？」

上を向いた由香里は、青白い顔をしていた。

「ちょっと、待つていて」

俺は、すぐ側にあつた自販機でジュースを数本買って、由香里に渡した。

「ありがとうございます」

由香里は小さな声で礼を言い、キャップを開けようとすると、力が入らないようだ。

開けてやると、由香里は俺にもう一度礼を言い、ジュースを飲んだ。

「美味しい」

口元が少しだけ上がる。

その表情が、由里子と似ていてドキリとした。

俺は気持ちを落ち着かせて由香里に言った。

「良かつた。気分が悪いなら、送つて行くよ。家は何処?」

「あ・・・、その、大丈夫です」

見知らぬ男に付いて行く程馬鹿ではない・・・か。

「そう、じゃあ

仕方ない。

一度去つて行く振りをしよう。

すると、由香里は慌てて俺に声を掛けた。

「これ、ジュース・・・!」

「あげるよ

離れた場所から様子を見ていると、由香里はジュースを鞄に入れて立ち上がった。

駅まで歩き、電車に乗る。

俺も距離を開けて付いて行く。

由香里が家に入ったのを確認して、俺も家に帰る為に、車が置いてある駐車場に向かった。

「付き合って欲しい」

学校からの帰り道、呼び止められて、告白された。

「『めんなさい』」

今、それどこの誰ではないの。

私はよく、告白される。

見た目だけは、まあまあ良いからなのだろう。話した事もろくにない相手と、どうして付き合おうなどと思つたのだろうか。

私には、今一つ理解出来なかつた。

静かな廊下を、祖母の病室まで歩く。

「こんなには」

隣のベッドの人挨拶しながら祖母の元に行くと、今日は少し具合が悪そうだった。

「由香里・・・」

「しんじ?」

「ちょっと熱が出ただけだよ」

負担にならぬよう、早く帰らつか・・・。

そう思つてゐると看護師さんがやつてきて、先生からお話をあると言われた。

忙しい先生を待つて、やつと話を聞くと、手術の日が決まつたと言われた。

「宜しくお願ひします」

それ以外、何と言えばよいのか。

祖母の汚れた寝間着などを袋に詰めて、病室を後にする。外はもう暗くなっていた。

もうすぐ家に着く。

その時、誰かが自宅の前に面する事に気が付いた。  
え・・・?

恐る恐る近付くと、それは夕方告白してきた男子だつた。彼は私に気付くと、「中西!」と大きな声で呼んだ。  
何故私の家を知っているのか・・・。  
氣味が悪い。

逃げ出したい気持ちになつたが、何処にも避難出来る場所など無い。

「中西、俺と付き合つてくれ」

それはもう断つた筈。

だいたい、私はこの人の名前さえ知らない。

「・・・無理」

「どうして!」

「・・・何? 分からないの?」

「こんな、家まで押し掛けられても困る」  
本当に迷惑。

「俺の何がいけないんだ?」

「帰つて」

横を通り過ぎよつとしたら、腕を掴まれた。

「やめて！」

「中西！」

何なのだろう、この人は。

掴まれた腕を振り解こうとするが、更にもう片方の腕まで掴まる。

洗濯物の入った袋が、道路に落ちた。

「嫌！」

強引に引き寄せられて、揉み合ひになる。

「あ・・・！」

腕に痛みが走る。

「痛い！やめて！」

恐怖が背中を這い上がる。

助けを呼ばなければ危険だと思い、叫ぼうとした瞬間、口を手で

塞がれた。

嫌・・・！

暴れても適わない。

私はどうなつてしまつのか。

その時

眩しい光と共に、一台の車が近付いて来た。

眩しい光が私達を照らす。

目の前で車が停まり、運転席から人が飛び出してきた。

「何をしているー！」

私を拘束していた男子がビクリと震えた。

その人は、男子の腕を掴み、私から引き剥がした。

「あ・・・」

見覚えがある・・・。

私を助けてくれた人は、以前ジュースをくれた男だ。力が抜けた私は、ヘナヘナとその場に座り込んだ。

「大丈夫か？」

男は私の腕を掴み、立たせる。

あ・・・。

不意に何かを思い出しそうになつたが、それが何だつたか分かる前に、男は私に言った。

「家に入つて、鍵を閉めて。俺が戻つてくるまで、誰か訪ねて来ても決してドアを開けないように。早く」

男に背中を押され、私は訳が分からぬまま、鍵を開けて家の中に入った。

外から揉める声が聞こえたが、すぐに静かになり、車が走り去つた。

どれくらいの時間が経ったのかは分からぬが、車の音がして、家の前に停まる。

チャイムが鳴り、玄関に座り込んでいた私は、恐る恐るドアに近付く。

「あの・・・、さつきの者だけど」

先程の男・・・。

普段なら、警戒して開けないドアを、私は簡単に開けてしまう。私の顔を見た男は、ホッとした顔をして微笑んだ。

「大丈夫か？ 恐かつたな」

そして私の頭を撫でる男に、私はまた何かを思い出しそうになる。何だろう・・・。

「これを」

差し出された紙。

「君に一度と近付かないって誓約を書かせた。相手の親にも厳重に注意するよう言つておいたから」

男はそれに、胸ポケットから取り出した小さな紙を添えた。

「俺の名刺。そうだ、名前言つて無かつたね。俺は坂本篤。携帯の番号も書いてあるから、もし何かあつたら電話して」

私の手に紙を握らせ、男は首を傾げた。

「家の人は、居ないのか？」

私は頷いた。

「そうか。出来れば今回の事を、説明したいんだけど」

「え・・・？」

「駄目・・・！」

私は咄嗟に答えた。

病気の祖母を、心配させる訳にはいかない。

「しかし・・・、これから的事もあるし」

これから？

「気を付けないと、同じ事がまたいつ起こるか分からないよ。今日は、偶々俺が通り掛かつたから良かつたけど・・・」

「・・・・！」

ゾクリと寒氣を感じ、私は自分を抱き締めた。

またこんな事が・・・？

「近くに、頼れる人は居る？」

近所の人とは挨拶をする程度の付き合いだし、友人の家は遠い。

小さく首を振る私に、男 坂本さんは、眉を寄せる。

「家人は、帰つて来ないの？」

「入院・・・してる」

「入院？病気なのか。退院の予定は？」

「まだ・・・」

坂本さんは、「そうか・・・」と言ひつて、額に手を当てた。

「じゃあ、戸締まりをしつかりして、暗い時間には絶対に外に出ないよう。いいかい？」

頷いた私に少しだけ笑顔を見せて、坂本さんは続けた。

「俺は仕事でよくこの近くに来るから、帰りに寄るよ」

「え・・・？」

どうして？

「成り行きとはいえ、助けたんだ。乗りかかった船・・・とか。

それに、男の出入りが無い家は、狙われるよ。親戚のおじさんとも思つてくれればいい

狙われる・・・？」

「怖い時や困った時は、いつでも電話しておいで。出来る限り力になつてあげるから」

私の頭をポンポンと叩く坂本さん。

その優しい瞳に、私は安堵した。

それから坂本さんは、時々家に来るようになつた。

仕事帰り、俺は車で由香里の家に向かう。

今日は少し時間が遅い。

顔を見る事は出来ないだろ？が、無事に帰宅しているかだけでも確認したい。

仕事で疲れた身体に鞭打ち、バンドルを繰る。

そして、由香里の家の近くまで来た時、俺は異変に気付いた。

「・・・・・？」

誰か、居る？

ヘッドライトで照らし、俺は驚愕した。

由香里

！！

車を停め、飛び出す。

「何をしている！」

目を見開いている男を強引に引き剥がすと、由香里は大きな瞳に涙を溜めて、道路にへたり込んだ。

「大丈夫か？」

腕を掴んで由香里を立たせ、頭の先から足の爪先まで、無事かどうかをチェックする。

「家に入つて、鍵を閉めて。俺が戻つてくるまで、誰か訪ねて来ても決してドアを開けないように。早く」 ショックを受けている由香里についてやりたいが、片手で捕まえている男が暴れている。俺は力がそれ程強くないので、このままだと逃げられてしまう。

やむを得ず由香里を家中に押しやり、俺は暴れる男を渾身の力で車に叩きつけた。

「イテーな、おつせん！離せよー！」

ふざけるな。

俺の由香里を泣かせて、ただで済むと思つていいのか。  
「このまま警察に行けば、お前の人生は台無しになるな」

「…………」

男の動きがピタリと止まる。

「あ・・・・・」

視線を彷徨わせ、しどろもどろに言い訳を始めた。

「そ、そんなつもりじゃ・・・・」

では、どういうつもりだつたのだ。

「俺はただ、中西と付き合いたかつただけで・・・・」

見た目は未成年のこの男、おそらく由香里と同じ高校生なのだろう。

事の重大さが分かつたのか、急に怯えだした男を、車の中に押し込む。

「お前の家に案内しる」

もう一度と、由香里に近付けさせない。

俺は怒りのままに、アクセルを強く踏み込んだ。

男の家から戻ってきた俺は、由香里の家の前に車を置き、チャイムを押した。

人が近付く気配がある。

「あの・・・・、さつきの者だけど」

俺がそう言つと、簡単にドアは開いた。

やはり不安だったのだろう。

俺の顔を見た由香里は、ホッとして、身体から力を抜いた。

その頬に涙の後が幾筋もあり、心が痛む。

「大丈夫か？ 恐かつたな」

頭を撫でると縋るような視線で俺を見る。

ああ、可愛い由香里。

守つてやりたい。

「これを。君に一度と近付かないって誓約を書かせた。相手の親にも厳重に注意するよう言っておいたから」

警察に届けると言つたら、相手の親は慌てふためいた。

本当はこの街から出て行つて欲しいのだが……いや、むしろ由香里を俺のもとに連れ帰りたい。

### 俺の由香里。

あの男に襲われる由香里を見て、俺は気付いた。

誰にも触れさせたくない。

由里子は、由香里は、俺のものだと。

もう一度と失敗はしない。

その為には、まず由香里に信用してもらわなくては。

俺は胸ポケットから取り出した小さな紙を、誓約書に添えた。

「俺の名刺。そうだ、名前言つて無かつたね。俺は坂本篤。携帯の番号も書いてあるから、もし何かあつたら電話して」

由里子の手に紙を握らせ、男はわざとらしく首を傾げた。

「家の人は、居ないのか？」

由里子が頷く。

「そうか。出来れば今回の事を、説明したいんだけど」

由里子の祖母を味方に付けたい。

だが由里子は目を見開いて、拒否した。

「駄目……！」

「しかし・・・」これから的事もあるし

由香里は口を半開きにして俺を見つめる。

「気を付けないと、同じ事がまたいつ起こるか分からぬよ。今回  
は、偶々俺が通り掛かつたから良かつたけど・・・」

「・・・！」

決して齎しなどではない。

お婆さん公認でこの家に出入り出来れば由香里も安心すると想ひつ

のだが。

「近くに、頼れる人は居る？」  
居ないだろ？

「家の人は、帰つて来ないの？」

「入院・・・してる」

知つてている。

「入院？病気なのか。退院の予定は？」

「まだ・・・」

「そうか・・・」

お婆さんは、相当具合が悪いな。

「じゃあ、戸締まりをしつかりして、暗い時間には絶対に外に出ないようだ。いいかい？」

素直に頷く由香里。

「俺は仕事でよくこの近くに来るから、帰りに寄るよ」

「え・・・？」

本当は仕事が終わってから来ているのだが・・・な。

「成り行きとはいえ、助けたんだ。乗りかかった船・・・というか。  
それに、男の出入りが無い家は、狙われるよ。親戚のおじさんとも思つてくれればいい」

今は。

「怖い時や困つた時は、いつでも電話しておいで。出来る限り力に

なつてあげるから

全力で守るよ。

俺の由香里。

それから俺は、時々家も訪問するようになつた。

週に二度程、坂本さんはついでに来る。

「変わりない?」

私の顔を見ると、坂本さんはまず始めにそう訊く。

学校は?お婆さんの容体は?

「来週、手術なんです」

「そう。君も無理しないようにね」

玄関でほんの少し会話して、坂本さんは帰る。

決して部屋に上がり込むとはしない。

玄関の鍵をかけて、道路に面した窓のカーテンの隙間から外を見ると、坂本さんがこちらを振り向いて手を振る。

私も小さく手を振ると、坂本さんは車に乗つて帰つていった。

### 祖母の手術の日

私は学校を休んで、病院に来た。

手術室に入る祖母を見送り、待ち合いで室に行く。

本を持って来たが読む気にはなれず、只々ボーッと壁を見つめていた。

そして一時間が経つた頃、不意に聞こえた声に、私は驚いた。

「由香里ちゃん」

振り向いた私の目に飛び込んできたのは、坂本さんの顔。

「坂本さん・・・?」

「どうしてここに……。」

「仕事、早く終わつたんだ。今日手術だつて言つてたから病院に寄つてみたんだけど、会えて良かった」

坂本さんは私の隣に座り、コンビニの袋からジュースを取り出した。

「ありがとうございます」

目の前に差し出されたジュースを手に取るが、飲む氣にはなれず、ペットボトルを握りしめて俯く。

そんな私に、坂本さんは何も言わない。

一人共無言のまま、ただひたすら時が過ぎるのを待つた。

そして・・・数時間後、チラリと時計を確認する。

予定の時間を過ぎている。

どうしたのだろう・・・。

最悪の場面を想像し、そんな自分に嫌悪を感じる。

その時

そつと伸びてきた手が、私の左手を握りしめる。顔を上げると坂本さんと目が合つ。

夏がすぐ近くまで来ていたこの日、冷房のきき過ぎた病院内で、

坂本さんの手だけが暖かかった。

週に二度程、俺は直接由香里を訪ねる。いきなり毎日訪ねて警戒されたくないので、後は今までと同じよう、影から由香里を見守つた。

「来週、手術なんです」

お婆さんの具合を訊いたら、由香里はそう言つた。  
具体的な日時をさりげなく聞き出し、名残惜しいが由香里の家を出る。

外に出て振り返ると、由香里がカーテンの隙間から俺を見ていた。手を振ると由香里も小さく手を振つてくれる。

なんて可愛く、いじらしいのだろう。

ずっと見ていたいが、俺は未練を振り切つて車に乗つた。

由香里の祖母の手術の日、俺は仕事を休んだ。

朝、家を出る由香里を見送り、俺も車で病院に向かう。  
大勢の患者に紛れて待つていると、由香里がやってきた。  
緊張した面持ちで、真っ直ぐに病棟エレベーターに向かつて歩いて行く姿に、心が締め付けられる。

大丈夫、きっと手術はうまくいく。

由香里の背中に語り掛け、俺は暫くその場に留まつた。

手術開始から一時間後、俺は近くのコンビニで買ったジュースを持って、由香里が居るであろう待合室に行く。

そして、予想通りの場所で由香里を見つけた。

壁をじっと見つめる由香里は、こんな時に不謹慎だが、美しい。

「由香里ちゃん」

声を掛けると振り向き、大きな田を更に見開いて、俺を見つめる。「坂本さん・・・」

「仕事、早く終わったんだ。今日手術だつて言つてだから病院に寄つてみたんだけど、会えて良かつた」

俺がジュースを差し出すと、由香里は礼を言つてそれを受け取つた。

俯く由香里の横に、大胆にも俺は座る。

長い睫毛や形の良い唇を間近で見つめ、胸が高鳴る。

そうして見つめていたら、由香里が不意に顔を上げ、壁に掛かっている時計を見上げた。

いつの間にか数時間が経つていたようだ。

不安そうな表情で、再び俯く由香里。

思わず、その左手を握りしめる。

由香里は目を見開いて俺を見たが、何も言わなかつた。

俺は由香里の細く冷たい指先を、自らの熱と思いを込めるように握り続けた。

医者は言った。

「思つていたより悪かった」

だから・・・どうしていつのまにか。

「お婆ちゃん、そここの段差、気を付けて」

「大丈夫、分かっているよ」

古いこの家には、細かい段差が沢山ある。

私が左手を持って支え、坂本さんが右手と腰を支えて居間へと入る。

座椅子に座らせると、祖母はフウ・・・・と息を吐いた。

「ああ、やつと帰つてこれた。やつぱり家が一番だね」

「今、お茶淹れるね。坂本さんも座つて下さー」

今日、祖母は退院した。

坂本さんが仕事を休んで一緒に病院に迎えに行つてくれたので、随分楽に連れ帰る事が出来た。

祖母は私が坂本さんを『知り合』として紹介しても、意外にもさほど驚きもせずに頭を下げた。

「いや、俺は・・・」

「お茶くらい飲んで行つて下さい」

帰ろうとする坂本さんを引き止め、私は窓を開けて古い扇風機のスイッチを入れてから台所に行く。

流れる汗をハンカチで拭きながら、湯を沸かした。

外から聞こえてくる、蝉の声。

夏休みも既に半分が過ぎていた。

この暑さは祖母の身体には堪えるだろ。ハ。

通院も辛いに違いない。

私がもう少し早く生まれて仕事をしていれば、お給料でエアコンを買う事も、車で病院に連れて行く事も出来たのに・・・。

溜息を吐いて、ガスの火を切る。

本当はこの夏から、バイトをするつもりだった。  
だけどその話をしたら、祖母が猛反対したのだ。

「子供がお金の心配なんてしなくていい」

・・・私はもう『子供』なんて歳では無い。  
しかし祖母はバイトを許さなかつた。

保険も入っているし、貯金も少しはある、そしてそれよりも傍に居て欲しいと言われては、さすがに私も反論出来なかつた。

お盆に熱いお茶と冷蔵庫から出した麦茶を載せて居間に戻る。

「坂本さんは、熱いお茶と麦茶、どちらがいいですか？」

「じゃあ麦茶を貰おうかな」

麦茶を坂本さんに出して、熱いお茶を祖母の前に置く。

「お婆ちゃん、熱いから気を付けてね」

「分かっているよ、由香里。

心配し過ぎなんですよ」

後半は坂本さんに言って、祖母は笑う。

坂本さんが少し笑つて頷いた。

この二人は気が合うのだろうか？

和やかな雰囲気で、私達はお茶を飲んだ。

アルバイト・・・？

由香里の言葉に俺は驚いた。

何故・・・いや、家計が苦しいのだろう。

しかし、それは駄目だ。

俺は由香里に働いて欲しくない。

また以前のように、危険な目に遭つたらどうするのだ。

ほんの数時間？

その数時間が危険なのだ。

由香里は気付いていないのか？自分がどれだけ人を惹き付ける容姿をしているのかを。

俺は溜息を吐いて考える。

少々頑固なところがある由香里を説得するには・・・。

由香里の祖母は、俺の話に耳を見開いて驚いた。

「そんな事が・・・」

由香里が暴漢に襲われた事、偶然通り掛かった俺が助けた事、そしてそれがきっかけで由香里と親しい関係になつたと俺は言った。

「お婆ちゃんには内緒にして欲しいと言っていたのですが・・・」

そんな事があつたのに、由香里がアルバイトをすると言つていると教えると、お婆さんは眉をひそめた。

「只でさえ女の子の一人暮らしは危険なのに、その上アルバイトなんて、もしまだ何かあつたらと思うと心配で・・・、前回は偶然助ける事が出来たから良かったのですが、そんな偶然が続く訳ありま

せん「

俺は断言し、お婆さんは由香里のアルバイトを許可しないで欲しいと懇願した。

お婆さんは俺の言つ事をあつたつと信じ、頷いた。

最後に、俺が病院に来た事を絶対に由香里に話さないよう念押しして、俺は病院を後にした。

おそらく、これで大丈夫。

由香里はお婆さんの反対を押し切つてしまい、バイトする子ではない。

そして・・・予想以上に、お婆さんは俺を信用してくれたようだ。

思わぬ収穫に口元も綻ぶ。

俺は上機嫌で、車を走らせた。

週末の大型スーパーは、親子連れで賑わっている。

坂本さんがカートを押し、私が食材をそこに入れしていく。  
買い物力ゴがいっぱいになると、私達はレジに向かう。  
そしてそこで、坂本さんがお金を払う。

「ありがとうございます」

私は礼を言つて、袋に買った物を詰め込む。

最近は、毎週末これが続いている。

坂本さんは、『買い物代を払う代わりに、由香里ちゃんの作った  
食事を食べさせて欲しい』と言つ。

どう考えても坂本さんにとつて割に合わない条件だが、彼はそれ  
でいいと言うのだ。

家に帰り、食材を冷蔵庫に入れて、坂本さんと祖母にお茶を出す。

「今、お昼ご飯用意しますから」

私が作る料理を、坂本さんは美味しいと言つてくれる。

昼食を終えて少しすると、坂本さんは帰る。

玄関まで見送り居間に戻ると、祖母が笑つて言つた。

「いい人だね」

「・・・うん」

カーテンの隙間から坂本さんに手を振りながら、私は頷いた。

「由香里・・・」

学校に着いてすぐ、私は友人に話しかけられた。

「おはよう、麻美。なに?」

「うーん・・・、あのさあ」

麻美は言いにくそうに、首を傾げて私を見た。

「土曜日は、由香里と男の人が買い物してるの見たんだけど・・・」

「え・・・？」

坂本さんと買い物しているのを見られたのか。

「あの人って、まさか彼氏?」

「え・・・？」

麻美の言葉に、私はポカンと口を開けた。

「え?違うの?」

麻美も驚いている。

「う、うん。違う」

「なんだ、そうなんだ。私てつきり・・・じゃあ、あの人誰?」

そう言われて、私は一瞬言葉に詰まつたが、「知り合い」と答えた。

「知り合い・・・?」

襲われた事を、私は麻美に言つてない。

だから、他にどう言えば良いのか分からなかつた。

「ふーん、そう」

ちょうど先生が来た事もあり、麻美はそれ以上訊いてこなかつた。そして私はその後、授業に集中出来なかつた。

彼氏・・・に、見えるのだろうか?歳だって離れているのに。

・・・改めて考えると、自分と坂本さんってどういう関係なのだ

うう。

それから私は、坂本さんを何となく意識してしまつようになった。

最近、由香里の様子がおかしい。

何故なのだろう。

週末には一緒に買い物に行くし、一見以前と変わらないのだが、それでもやはり何かおかしい。

悩み事でもあるのだろうか？

お婆さんの事か？学校の事か？

しかし、困っている事は無いかと訊くと、由香里は首を横に振る。どうしたのだ。

もつと俺を頼って欲しい。

俺では頼りにならないのか？

ああ、もつと・・・由香里の事を、由香里の心を、知りたい。由香里、俺の由香里・・・。

俺の心は由香里でいっぱいだ。

就職先を探さなくてはならない。

夏が終わり、周りは受験勉強で忙しい。

私も学校の先生に、就職の相談をしているのだが・・・。  
「難しいな。この不況だろう。募集している会社もあるが・・・、  
正直あまり勧められないところが多いな」

想像以上に厳しい現実。

片つ端から入社試験を受けに行くしかないのだろう。  
そして・・・、そんな状況に追い討ちをかけるように、祖母の具  
合がまた悪くなつた。

「ごめんねえ」

病院のベッドに横たわり、祖母は謝罪の言葉を口にする。  
私は静かに首を振つた。

「ごめんなさい。

無理をしている事に、気が付いていなかつた。

帰る際、偶然会つた医者と少しだけ話をして、私は外に出た。  
暗い気持ちを抱えたまま電車に乗り、とぼとぼと歩く。

「あ・・・」

家に近付いた時、見えた車に思わず声を上げた。

「由香里ちゃん！」

坂本さんが車の中から飛び出して来る。

気が付けば私は、坂本さんの腕の中で泣いていた。

「探しに行こうかと、思っていたんだ」

坂本さんに支えられて入った居間で、私はボロボロと涙を流した。  
「お婆ちゃんが・・・また入院して・・・」

「ああ」

坂本さんは私の背中を優しく撫でながら、話を聞いてくれる。  
やがて・・・涙も声も枯れた時、坂本さんが立ち上がりうつとした。  
「嫌・・・！」

咄嗟にその腕にしがみつく。

「行かないで・・・」

坂本さんは目を見開き、それから私を強く抱きしめた。

「・・・ああ」

その夜、坂本さんはついに泊まつた。  
一つの布団で、ただ手を繋ぎ、私達は眠つた。

## 妻1-1（後書き）

第1話（妻1）で、主人公の苗字が「斎藤」となっていましたが、正しくは「坂本」です。お詫びして訂正します。

いつものように、仕事が終わってから由香里の家に向かつ。しかし、着いてすぐに俺は異変に気付いた。

明かりが点いていない・・・。

何があつたと言つのか。

考えられる事と言えば、やはりお婆さんの病氣の悪化か。最近、お婆さんは具合が悪い。

由香里には必死に隠しているが、俺にはこいつをさうと言つた。『由香里を頼めますか?』と。

俺が黙つて頷くと、お婆さんはホッと息を吐いて笑つた。

病院に行つてみよう。

しかしその時、じわじわと向かつて歩いて来る由香里の姿に気が付いた。

「由香里ちゃん!」

俺が車から飛び出すのと由香里が駆け出るのは、同時だった。

由香里は俺の胸に縋り付き、泣いた。

崩れ落ちそうな由香里を支え、家の中に入る。

「お婆ちゃんが・・・また入院して・・・

「ああ」

やはつやうだつたか。

由香里は今まで心中に溜めていた思いを、壇を切つたよつと吐き出した。

俺はどうしてやる事も出来ず、ただひたすら由香里の背を撫でる。

やがて落ち着いた由香里に飲み物を持って来ようと俺は立ち上がった。

「嫌……！」

「え……？」

「行かないで……」

「……由香里！』

俺は由香里を、強く抱きしめた。

「……ああ」

どこにも行かない。

離しはしない。

その夜、俺は由香里の家に泊まつた。

月明かりに照らされ眠る由香里は、美しい。

俺は一晩中、飽くことなく由香里の姿を眺めていた。

祖母は入退院を繰り返しながら、緩やかに、そして確實に悪くなつていつた。

学校と就職活動と祖母の看病。

そのどれもを上手くこなしたいて思いながら、どれもが中途半端になつていて。

疲れた。

休みたい。でも休む事は出来ない。

卒業は間近に迫っている。

「由香里ちゃん」

そんなある日、坂本さんが言つた。

「結婚しよう」

「結婚……？ 坂本さんと？」

「俺みたいなおじさんは、嫌かい？」

「嫌……じゃない。」

「嫌じゃない」

坂本さんは私の手を握つた。

「幸せにするよ」

ああ、私はこの人が好きなんだ。

この時初めて、私は自分の気持ちにほつきつと気が付いた。

結婚すると言つたら、祖母は涙を流して喜んでくれた。

「必ず、幸せになります  
宜しくお願いします」

病室のベッドの上で、祖母は坂本さんに深く頭を下げた。

私の高校卒業と同時に、私達は籍を入れる事にした。

「由香里・・・、お母さんにも報告しに行つといで」

「・・・うん」

正直、必要とは思えなかつたが、祖母の言葉に私は頷いた。

疲れている。

学校とお婆さんの看病、そして決まらない就職。

由香里の精神は、ギリギリの状態のようだ。

由香里・・・。

「結婚しよう」

俺は、以前から考えていた言葉を口にする。  
由香里は戸惑いながらも、俺の手を取った。  
ああ・・・。

この瞬間を、俺は待っていた。

感動に身体が震える。

「幸せにするよ」

今度こそ、必ず。

由香里は俺の顔を見て、泣きながら微笑んだ。

お婆さんは俺と由香里の結婚を喜んでくれた。

由香里が高校を卒業したら、すぐに籍を入れる事にした。

「由香里・・・、お母さんにも報告して行つとして  
「・・・・・・うん」

由里子・・・。

あの場所・・・か。

由香里と初めて会ったのは、あそこだつたな。

由香里と出会つてから、あの場所には一度も行つていない。  
その必要が無くなつたから。

俺と由香里は、次の週末に墓参りに行く約束をした。

久し振りの墓参り。

「いらっしゃいです」

私は坂本さんを、母の眠る場所へと連れて行つた。  
祖母が病気になつてから来ていなかつたので、墓は汚れていた。  
私はお供え物や掃除する為の道具を墓の前に置いて、手桶だけを  
手に持つた。

「水、汲んできます」

「一緒に行くよ」

坂本さんが手を差し出があるので、私は手桶を渡した。  
坂本さんは、いつもこうして私に荷物を持たせない。

私は、大事にされている。

荷物の事だけではなくて・・・、婚約もして、いつでも手を出せる  
この状況でも、坂本さんは私を抱きしめる以上の事をしない。

そんなところが、好き。

私が服の袖を掴むと、坂本さんは少し私を見て、

「ああ・・・」

それから手を繋いでくれた。

優しくて、ちょっと素っ気ない。

そんなところも、好き。

私達はゆっくりと、水道まで歩いた。

水の入った手桶を、坂本さんが持つ。

「行こうか」

「はい」

そして墓へと戻る途中、小さな窪みに足を取られ、私は転げた。

「由香里！」

「痛あ・・・」

擦り剥いた膝の痛みに眉を寄せながら立ち上がろうとした時、腕がグイッと引っ張られた。

「あ、ありがと

」

顔を上げた私は驚いた。  
心配そうに眉を寄せる顔。

・・・知っている。

この顔を、知っている。

「由香里ちゃん、大丈夫か？」

私を見つめる、切ない瞳。

坂本さんは私を立たせ、怪我が無いか確認するように全身を見て、私の頭を撫でた。

「痛いところは無いか？」

「・・・・・」

「由香里ちゃん？」

首を横に振ると、坂本さんはホッと息を吐いて、土の上に転がった手桶を拾つた。

もう一度水を汲む為に水道に向かう坂本さんを、私はじっと見つめる。

「坂本さん・・・」

振り向いた坂本さんに、問う。

「昔・・・、ずっと昔、会った事がありません？」

「いいで

坂本さんが、目を見開いた。

あの頃のよつこ、辛く悲しい気持ちにはならない。

それは、隣に由香里が居るから。

久し振りに見た墓は、随分と汚れていた。

由香里が荷物を墓の前に置き、手桶だけを持つ。

「水、汲んできます」

「一緒に行くよ」

手桶を受け取る。

歩きだすと、由香里が遠慮がちに俺の袖を引っ張る。

「ああ・・・」

なんて可愛い。

手を繋いで、歩く。

「この手をずっと、離さない。」

水の入った手桶を持つ。

「行こうか」

「はい」

俺の斜め後ろを由香里が歩く。

ところが、墓へと戻る途中、由香里が小さな窪みに足を取られて

転げた。

「由香里ー。」

「痛あ・・・」

蹲る由香里。

俺は慌てて、由香里の腕を引っ張った。

「あ、ありがと  
由香里が顔を上げる。」

「由香里ちゃん、大丈夫か？」

俺は由香里を立たせ、怪我が無いか確認する。  
少しだけ、膝の皮が擦り剥けていた。

俺は由香里の頭を撫でた。

「痛いところは無いか？」

「・・・・・」

どうした？どこか痛むのか？

「由香里ちゃん？」

由香里が首を横に振る。 大丈夫か。 ホツと息を吐く。

そういえば、由香里は昔もここで転けたな。

あの時も、こうして立たせて、そして由里子を見付けたのだ。

まるでそれを再現しているようだな。

小さく可愛かった由香里は美しい女性に成長し、もうすぐ俺の妻となる。

そう、俺の妻となる。由香里も由里子も。

先程思わず放り投げてしまつた手桶を拾い、もう一度水を汲む為に水道に向かう。

「坂本さん・・・」

その時、由香里が躊躇いがちに声をかけてくる。

「昔・・・、ずっと昔、会つた事がありません?  
え・・・・・？」

俺は驚いて、由香里を見た。

「昔・・・、ずっと昔、会った事がありませんか？」

で

私が訊くと、坂本さんは目を見開いた。

「今と同じように、私が転けて、坂本さんが助けて、そして、  
そう、そして頭を撫でてくれて」

話しているうちに、記憶が次々と蘇ってくる。

腕を引っ張る強い力、頭を撫でる優しい手、私を見つめる・・・  
切ない瞳。

「あれは、坂本さんじゃ

私の言葉は、そこで途絶えた。

何故なら、坂本さんが私を強く抱きしめたから。

坂本さんは、私の髪を、背中を撫でながら、身体を震わせる。  
私はどうしていいのか分からず、だけど、坂本さんが泣いていた  
から・・・、その背中に手を回した。

「覚えていてくれたなんて、思わなかつた」

母の墓の前に立ち、坂本さんは私の肩を抱く。

「うん、忘れてた。さっきまで」

やはり、あれは坂本さんだったのだ。

小さな頃会つた人と再会し、結婚する。それはなんだか

◦

「運命の・・・人みたい」

私が呟くと、坂本さんは肩を抱く手に力を込めた。

「『みたい』じゃない。運命なんだ」

私達は、見つめ合つ。

「俺達は再び出会い、愛し合ひ運命だつたんだ」

ああ、そういうのだろうか。

今までまったく信じていなかつた『赤い糸』といつもの、私は初めて意識して・・・、それがなんだか恥ずかしい。

私は赤くなつてゐるであろう類を誤魔化すように少し俯き訊いた。

「坂本さんは、あの時どうしてここに？」

何故墓地に居たのだろうか？

すると坂本さんは、私の頭を撫でた。

「墓参りに

「墓参り？」

「ああ

誰の？

だけど坂本さんが、あの時と同じ切ない瞳をしたから・・・、だ

から、私はそれ以上何も訊かなかつた。

「昔……、ずっと昔、会った事がありませんか？」

で

俺は驚き、目を見開いた。

「今と同じように、私が転げて、坂本さんが助けて、そして、そり、そして頭を撫でてくれて」　ああ、ああ。由香里。

「あれは、坂本さんじゃ」

俺は由香里を強く抱きしめた。

覚えていたのか？　あんな少し会つただけの俺を。  
・・・いや、そうではない。

これはおそらく、由里子の魂の記憶。

由里子は俺を忘れないなかつた。

由香里の肉体に入り、由香里と一つになつた由里子が、俺を求めてくる。

俺ともう一度、やり直そうとしている。

由里子・・・由香里・・・、愛している。

幸せになろう、今度こそ。

由香里がそつと俺の背中に手を回す。

俺は感動で涙が溢れ、止まらなかつた。

「覚えていてくれたなんて、思わなかつた  
由里子が俺を求めていたなんて。

「うん、忘れてた。さつきまで」

由香里は少し俯いて、呟いた。

「運命の・・・人みたい」

由香里、違う。

「『みたい』じゃない。運命なんだ」

由香里が顔を上げる。

「俺達は再び出会い、愛し合つた運命だつたんだ」

そつ、これは俺と由里子と由香里の運命。

由香里は恥ずかしそうに、再び俯いた。

「坂本さんは、あの時どうしてここに？」

俺は由香里の頭を撫でる。

「墓参りに」

「墓参り？」

「ああ」

いつか、由香里にも話をつけ。  
俺達の運命の物語を・・・。

瞬く間に時は過ぎ、私は高校を卒業した。

その間に私は坂本さんの実家に連れて行ってもらい、『家族へ挨拶』をした。

坂本さんの家族は、私をとても歓迎してくれた。

ああいう暖かい家庭で育ったから、坂本さんは優しいのだろう。それから写真館で、ウエディングドレスを着て写真も撮つた。式はやらないと決めていたが、「写真だけでも撮ろう」と坂本さんが言ってくれたからだ。

祖母に写真を見せると、とても喜んでくれた。

卒業式の翌日には婚姻届けを出し、私は『坂本由香里』になつた。祖母は起き上がる事さえ困難になつていた。そして・・・少しして、祖母は亡くなつた。

分かつていた事とはいえいざとなるとショックは大きく、呆然とする私に代わり、坂本さんが色々と手続きをしてくれた。小さなお葬式をして、祖母は母と同じ場所に入つた。

「お婆ちゃん・・・」

ありがとう。

墓の前で泣きじゃくる私を、坂本さんはそつと抱きしめてくれた。

あつとこゝろ間だつた。

由香里は高校を卒業した。

卒業式の日、俺は由香里の最後の制服姿を見る為に仕事を休んだ。  
ああ、涙を流す由香里の美しい姿。  
式終了後、話し掛けようとする男達より先に俺は由香里に声を掛けた。

「由香里ー。」

振り向いた由香里が笑顔を見せる。

男達の恨めしい視線を感じながら、俺は由香里を連れて学校を後にした。

卒業式の畠田には婚姻届けを出し、由香里は『坂本由香里』になつた。

それから暫くして、お婆さんは静かに息を引き取つた。  
ショックで呆然とする由香里に代わり色々と手続きをする。  
お婆さんには由里子以外に子は無く、親戚もいらないらしい。  
小さな葬式をしてお婆さんを天国へと送つた。

「お婆ちゃん・・・」

墓の前で泣きじゃくる由香里を、俺は抱きしめる。

これからは俺が守る。

由香里、由里子、幸せになろう。

俺達の新しい生活が始まった。

マンションでの新生活。  
専業主婦として、なに不自由ない暮らし。

私は幸せな毎日を送っている。

祖母の葬式から暫く経った頃、私達は本当の意味で夫婦になった。  
結婚してからずっと一緒にベッドで寝ているにもかかわらず、坂  
本さんはそれまで私になにもしてこなかつたのだ。

いつまでもなにもされない事に不安を感じた私は、ベッドの中で  
坂本さんに言つた。

「どうして抱いてくれないの？」

背中を向けて寝ていた坂本さんが振り向く。

「・・・抱いて」

その夜、坂本さんは初めて私を抱いてくれた。  
優しく、優しく。

ああ、そうか。私は気付いた。

私の心の準備が出来るまで、坂本さんは待っていてくれていたの  
だ。

「愛してる」

普段は無口でちょっと素つ氣ない坂本さんが何度も囁く。  
なんて、嬉しい。

なんて、素敵。

「好き」

私も囁くと、坂本さんは田を見開いて私を「ギュウ」と抱きしめてくれた。

「由香里、もう一度」

「好き」

「もう一度」

好き、好き、あなたが好き。  
何度も言える。

一生、離さないで。

一生、離れない。

そうして私は坂本さんの『妻』となり、坂本さんは私の『夫』となつた。

結婚してから暫くの間、俺は由香里を抱かなかつた。それは、由里子との初めての時のようになり、由香里から誘つて欲しかつたから。

夜、俺達は一つのベッドに入る。

抱きたい気持ちをこじらえて由香里に背を向け、俺は眠つた振りをする。

少しすると由香里が俺の背中に手を触れ、そして縋り付いてくる。

ああ、由香里が俺を求めている。

追い掛けで手が届かなかつた由里子が、今こじつて由香里となつて俺に縋る。

えもいわれぬ快感が身体中を駆け巡る。

由香里の温もりを感じながら眠れる幸せを噛みしめた。

毎晩それを繰り返し、そしてつよいにある由香里が言つた。

「どうして抱いてくれないの？」

俺は興奮を必死に抑え振り向く。

「・・・抱いて」

真っ直ぐ俺を見つめる瞳。

『身体の相性も、大切でしょ？』

由里子の声が聞こえる。

その夜、俺は初めて由香里を抱いた。

由里子に教えられた通りの方法で。

『そ、う、上手よ』

響く由里子の笑い声。

俺の背に手を回す由香里。

「愛してる」

愛してる。由里子、由香里。

「好き」

囁く由香里。

ああ、ああ。  
なんて愛しい。

「由香里、もう一度」  
「好き」  
「もう一度」

愛してる、愛してる。  
何度も言える。

一生、離さない。  
一生、離れない。

俺の愛しい妻  
・・・。

「行つてらつしゃい、あなた」

「ああ」

素つ氣ない返事をして夫は出て行く。  
私は玄関の鍵を掛け、ベランダから駅に向かう夫を見送った。

そして、今日は火曜日

。

私は夫の部屋に入り、クローゼットを開ける。  
その奥、積まれた荷物の一一番下。

几帳面に整理整頓されている物を動かし、隠されている箱を出す。

もう、残り少ない写真。

その一枚を手に取る。

若い頃の夫と、その隣で微笑む私にそつくりな女。

ビリビリビリ・・・。

写真を破る。

細かく、細かく。

小さなゴミの山が出来ると、私は箱を元通りに戻す。

クローゼットの扉を閉め、私はゴミを残さず掌で包み、夫の部屋を出る。

キッチンに行き、握っているそれをそこにある大きなゴミ袋に捨てた。

その袋を左手に持ち、ゴミ捨て場に行く。

私はいつたいどれだけこの行動を繰り返しただろう。  
袋をゴミ捨て場に置くと、自然と笑みがこぼれる。

燃えてしまえ。

あの女の写真も、記憶も。

「坂本さん。おはよひじぞーます」

掛けられた声に私は振り向く。

「おはよひじぞーます。」

「あら？ 坂本さん、なにかいい事があった？」

「はい」

もうすぐ、写真が無くなるのです。

部屋に戻り、洗濯物を干して掃除してワイドショードを見て・・・  
そして夫が帰つて来る。

「お帰りなさい」

「ああ」

素つ気ない返事をして夫は自分の部屋に入る。

私はリビングに行き、食事の準備をして夫を待つた。

そして一人で食事をして、順番にお風呂に入つて、一つのベッド  
で眠る。

「おやすみなさい」

「ああ」

背中を向けて眠る夫。

私はその背中に身体を擦り寄せる。

「ねえ、好き」

あなたが好き。

振り向いた夫と目が合つ。  
その瞳が見ているのは誰？

「好き」

だから、私を見て。  
私だけを。

夫の首に腕を絡め、私は笑った。

木曜日、俺は自宅に仕事を持ち帰った。

「先に寝てくれ」

由香里に言つて、俺は自室に籠もる。

本当は由香里との時間を最優先にしたいが仕方がない。  
生活するにはお金が掛かる。

由香里が働かなければいけないような状態にだけは、絶対にした  
くない。

深夜、やつと仕事を終わらせ、俺は伸びをする。

明日の準備をしながら俺はふと、クローゼットに目をやる。

最近、由香里は益々由里子に似てきた。

ベッドの中で俺を誘う笑顔が特に似ている。

久し振りに、見ようか。

結婚してから一度も見ていない由里子の写真を出すため、俺はクローゼットを開けた。

しかし、積まれた荷物の一番下の箱を取り出した時、俺は違和感  
を覚えた。

軽い・・・?

箱の中には写真がぎっしり詰まっている。けんに軽い筈はない。  
俺はその場で箱の蓋を開けた。

「 な！」

無い！写真がほとんど無い！  
箱の中には僅か数枚の写真しか入っていなかつた。  
どうして、誰が・・・誰が？

「由香里・・・」

そうだ、こんな事が出来るのは由香里しかいない。  
でも由香里には俺の部屋には入らないように言つてあつた。  
約束を破つた？どうして。  
知つていたのか、いつから？

[写真をどこにやつた？]

俺は残つていた写真を持って寝室に行く。  
そつとドアを開けベッドの脇に立つと、スヤスヤと眠る美しい由  
香里を見下ろした。

「由香里・・・」

頬に手を触れると、眉を寄せて薄く口を開ける。

口元に浮かぶ笑み。

伸ばされる両腕。

しかしその腕は途中で力を無くし、ベッドの上に落ちる。

「由香里・・・」

再び眠る由香里を、俺は呆然と見つめた。

朝、目覚めた私は、隣に寝っている筈の夫が居ない事に気付いた。不思議に思いながらまだ鳴っていない目覚まし時計のアラームを切り、私はリビングに行く。

そしてそこで、既にスーツを着た夫を見付けた。

「おはよう。早いのね」

「ああ」

私は驚いた。

こんなに早く起きて、しかも準備まで出来ているなんて。夫はどこか疲れた様子でニュースを観ている。

「もしかして、徹夜？」

「ああ」

仕事が忙しいのだろうか。

「すぐに朝御飯の準備するから」

私は急いで寝室に戻って着替え、顔を洗つて食事の準備をした。いつものように一人で食事をして、いつものように夫を見送る。

ベランダから手を振り、夫が見えなくなると部屋に戻った。

今日は、金曜日。

私は夫の部屋に入り、クローゼットを開ける。慣れた手つきで荷物をどかして・・・・・、そして、驚愕する。

箱が無い！

まさか、そんな。  
クローゼットの中の物を次々と引っ張り出しが箱が無い。  
どうして・・・、火曜日にはあった。このクローゼットに私は片付けた。

では、どうして？

さあつ・・・と血の気が引く。  
キョロキョロと辺りを見回し、夫の机の引き出しを順番に開ける。

無い、無い。

乱暴に椅子を退かして机の下、続けて横を見て、私はそこに置かれた箱を見付けた。  
震える指で蓋を開けると、そこには一枚の写真も入っていなかつた。

ああ、なんてこと。

氣付かれてしまった。  
夫はどう思ったのだろう。  
怒った？失望した？  
私は・・・どうなるのだろう。  
私は。  
私は。  
捨てる？

私が写真を捨てたように、今度は私が捨てるのだろうか。  
嫌だ、嫌だ！

なんと言ひ訳すればいい?  
私には夫しかいないので。

こんなに好きなのに。

ああ、私はなんて浅はか。

一時の感情に支配され、とんでもない事をしてしまった。

この生活を壊す気も、夫と別れる気も私には無い。

ならば何故、見てみぬ振りをしなかつたのか。  
何故写真を破いてしまったのか。

なにも知らぬ振りをしておけば、ずっと傍に居られるの。

床に呆然と座つたまま、どれだけの時間が過ぎたのか。  
ただひたすら後悔する私の耳に、聞こえる声。

「由香里」

振り向くと、愛しい男が立っていた。

一睡も出来なかつた。

朝、起きてきた由香里の顔を、俺はまともに見る事が出来なかつた。

由香里はいつもとなにも変わらない。

じうじて、いつから、じこじこ？

溢れ出やうな言葉を飲み込む。  
なにか理由がある筈だ。

考えなしにこんな事する女ではない。  
仕事から帰ってきてから、ゆづくつと話し合おう。  
自分に言い聞かせ、いつものように由香里と食事して、いつものよ  
うに家を出る。

ベルランダから手を振る由香里に手を振り返し、俺は会社に向かつ  
た。

マンションを見上げ、俺は深く息を吐く。  
やはりじうしても気になり、俺は午前で仕事を切り上げて帰つて  
きた。

重い足を引き摺るよひにして歩き、マンションの入り口で部屋番  
号を押す。

軽いチャイムの音がするが、由香里は出ない。  
出掛けた？いや、そんな。  
・・・・。

俺の知らないところで、由香里は何を考え何をしている？

由里子との悲劇の記憶が蘇り、ザアッと血の気が引く。

俺は結婚してから一度も使った事がない鍵を取り出した。

エントランスを抜け、エレベーターに乗り、玄関の鍵を開ける。

由香里、由香里。

乱暴に玄関ドアを開け、見えたのは・・・開け放たれたままの自室。

そこにいるのか？

靴を脱ぎ捨て数歩の距離を急ぐ。

そして俺が見たのは

「由香里・・・」

散乱する、物。

クローゼットの中の荷物は、すべて出されてている。

机の引き出しも開けられ、中身が床にぶちまけられていた。

その机の横に座っていた由香里が、弾かれたように振り向く。

由香里は目を見開き、這いつゝにしてこちらに来る。

「「めんなさい、めんなさい、めんなさい！」

俺の足に縋り付き、由香里は泣きながら狂ったように同じ言葉を繰り返した。

「『めんなさい』、『めんなさい』、『めんなさい』…」

許して下さい。

もう決して、あなたの秘密に触れたりしないから。  
なんでも言う事を聞くから。  
だから、だから

「捨てないで」

私にはあなたしかいないから。  
あなたに見放されたら、私は生きてはいけない。

「捨てる・・・?」

聞こえた呟きに、私は顔を上げた。

「由香里」

夫はしゃがんで私を優しく抱きしめる。

怒つて、いない？

戸惑う私を夫は立たせる。

「あっちへ行つて話そう」

肩を抱かれリビングに連れて行かれた私は、そこでもう一度抱き  
しめられた。

「いつ、知つた？」

私は夫の服を握りしめ、これまでの自分の過ちを告白した。  
入つてはいけない夫の部屋に入った事、写真を偶然見付けた事、

その写真を・・・捨ててきた事。

「ごめんなさい、ごめんなさい。でも嫌だったの。私を、私だけを見

て欲しかったの」

だからお願ひ。

「捨てないで」

私を捨てないで。

「由香里」

夫は私の髪を撫で、頬に、唇に、キスをする。目が合うと夫は微笑んだ。

「愛してる」

愛してる?

「愛してる、由香里」

私を?それとも・・・、それでも。  
傍に居れるのならば。

夫の背中に手を回し、私は嗚咽する。

暫くそうして抱き合い少しだけ気持ちが落ち着くと、夫は「ちょっと待つていて」と言つて立ち上がった。  
リビングを出て行き、すぐに帰つてくる。

「これ」

私は目を見開く。

見せられた数枚の写真。

夫は語つた、過去を。

私の母である女との出会い、別れ、それでもずっと好きだった事。

「初めて由香里を間近で見た時驚いた。由香里の中には由里子が生きていた」

夫はやはり、私ではなくあの女を求めているのか。

そつくりな顔を、身体を。

心中を悲しみが広がるが、唇を噛みしめてそれを押し殺す。

「運命なんだ。いつしてまた出会い、愛し合つ」

出会つたのは偶然？必然？絡まつた赤い糸は、あなたと誰を結んでいるの？

氣を抜けば吐き出してしまう。その言葉を必死に飲み込む。夫の望むままの姿で生きよう。それしかないのだから。覚悟を決めて顔を上げると・・・。

「え？」

田の前に差し出された写真。

どうこの意味か分からず私は困惑つ。

「由香里の好きにしてくれ」

好きに？それは・・・。

私は震える指で、写真を受け取つた。

俺の足に縋り付き、泣きじゃくる由香里。今まで何度も泣く姿を見た事はあるが、これ程までに取り乱しているのは初めてだ。

由香里は涙と鼻水と涎をたらしながら訴える。

「捨てないで」

俺は驚いた。  
誰が、誰を。

「捨てる・・・？」

なにを言っているんだ。

そんなことあり得ない。

俺はしゃがんで由香里を抱きしめ、それから立たせた。

「あっちに行つて話そう

崩れ落ちそうな身体を支えながらビングに連れて行き、そこで  
もつ俺は由香里を抱きしめた。

「いつ、知った？」

由香里は俺の服を握りしめて話した。

俺の部屋に入った事、写真を偶然見付けた事、その写真をゴミの  
日が来るたびに捨ててきた事。

「ごめんなさい、ごめんなさい。でも嫌だったの。私を、私だけを  
見て欲しかったの」

由香里は怯えた目で俺を見る。

「捨てないで」

ああ、そうだったのか。

俺は由香里がどうしてこんな事をしたのか理解した。

「由香里」

由香里の髪を撫で、頬に、唇に、愛情を込めてキスをする。  
なんて可愛い俺の由香里。

つまりこれは、嫉妬。

由香里は由里子に嫉妬していたのだ。

「愛してる。愛してる、由香里」

俺の腕の中で震える愛しい存在。

大丈夫。不安になる必要など無い。

暫くそうして抱き合つていると、少しだけ気持ちが落ち着いたのか、由香里の泣き声が小さくなってきた。

「ちょっと待つていて」

俺は由香里の背をポンポンと叩き、リビングを出て自室に向かつ。そしてそこに置きっぱなしだった鞄の中から写真を取り出した。数枚だけ残っていた由里子の写真、それを俺は今日持ち歩いていたのだ。

リビングに戻り、俺は写真を由香里に見せる。

「これ」

由香里は目を見開いた。

俺は語った、過去を。

由香里の母である由里子との出会い、別れ、それでもずっと好きだった事を。

「初めて由香里を間近で見た時驚いた。由香里の中には由香里子が生きている」

由香里の中に生きる由香里子の魂に気付いた時の喜びを俺は思い出す。

由香里は唇を噛みしめて、何度も頷いた。

「運命なんだ。じつじてまた出会って、愛し合つ

出会つたのは運命。

分かるか由香里？

いや、分からなくてもいい。ただ知つてもういたい。  
髪から頬へ手を滑らせると、由香里が顔を上げる。  
俺は由香里の田の前に『眞を差し出した。

「え  
？」

「由香里の好きにしてくれ

由香里は戸惑い視線を揺らし、それでも震える指で『眞を受け取つた。

週末

。

夫と私は車で出掛ける。

観光スポットとなつている場所を手を繋いで歩く。

昨日、夫の目の前で私は写真を破つた。

細かく、細かく。

「ミミと化した写真を見て、夫は笑つた。

ああ、そうなんだ。

私は確信した。

夫はあの女より私を選んだ。

夫の腕に抱かれながら、私は喜びに打ち震えた。

私は勝つたのだ、あの女に。

繋ぐ手に力を込めるど、夫は口元を綻ばせた。

「由香里、写真撮ろうか」

「写真・・・？」

そういうえば、ウェディングドレスを着て写真を撮つたが、それ以外に写真を撮つた事は無かつた。

夫はズボンのポケットから何かを取り出した。

「それ・・・」

「ん？ カメラがどうかしたか？」

デジカメなんて持つていたんだ。

夫はそれを近くにいた人に渡した。

「由香里」

並んで立ち、肩を抱かれる。

「撮りますよー！」

デジカメを構えた若い男性が大きな声で言つ。

撮り終えた写真を確認して、夫は男性にお礼を言つた。

「ねえ」

私は夫の腕に自分の腕を絡ませる。

「その写真、部屋に飾りたいな」

私とあなたの写真を家中に飾りたい。

顔を覗き込むと、夫は目を細めて笑つた。

「ああ」

大型スーパーで買い物をして、私達は家に帰る。

買つてきた物を冷蔵庫に詰め込んでお茶でも淹れようかと思つて  
いたら、夫が私の身体を後ろから抱きしめてきた。

「由香里・・・」

それはベッドへの誘い。

週末だけ、夫はこうして私を求める。

寝室に移動して、ベッドの上で私達は見つめ合つ。

「愛してる」

「私も・・・愛してる」

夫の首に腕を絡ませ顔を寄せる。

私達は明るい日差しの下で愛し合つた。

夫の目はしっかりと私を、私だけを見ていた。

## 夫最終話

思えばこんなふうに由香里とデートした事は無かつたな。  
週末の観光スポットは人で溢れていた。

由香里と手を繋ぎ、ゆっくりと歩く。

昨日、俺の目の前で由香里は写真を破つた。  
細かく、細かく。

由香里の嫉妬の深さがよく分かり、小さな声の口を見ていると  
言い知れぬ快感が身体を突き抜けた。

由香里が繋ぐ手に力を込める。

ああ、そうだ。

「由香里、写真撮りつか」

「写真・・・?」

ズボンのポケットからカメラを取り出す。

「それ・・・」

「ん? カメラがどうかしたか?」

由香里が首を横に振ったので、俺は近くにいた人にカメラを渡して写真を撮つて欲しいと頼んだ。

「由香里」

並んで立ち、肩を抱く。

「撮りますよー!」

カメラを構えた若い男が大きな声で言つ。

撮り終えた写真を確認して、俺は男にお礼を言つた。

笑う俺と由香里が綺麗に撮れている。

「ねえ」

由香里は俺の腕に自分の腕を絡ませる。

「その写真、部屋に飾りたいな」

可愛いおねだり。

「ああ」

勿論いいよ、由香里。

大型スーパーで買い物をして、俺達は家に帰る。

買つてきた物を鼻歌まじりに次々に冷蔵庫に詰め込む可愛い由香里。

俺は由香里を後ろから抱きしめた。

「由香里・・・」

ベッドに行こうか。

由香里の口元が綻ぶ。

寝室に行き、俺達は見つめ合つ。

「愛してる」

「私も・・・愛してる」

由香里は俺の首に腕を絡ませ顔を寄せる。明るい日差しの下、俺達は愛し合つた。

由香里が熟睡しているのを確認し、俺はそっとベッドから出る。掛け布団を捲つて由香里の全裸を見る状態にして、先程脱いだズボンのポケットからデジカメを取り出した。

パシャ、パシャ。

数枚写真を撮ると、由香里に掛け布団をかけて俺は自室へと向かう。

椅子に座つてパソコンの電源を入れ、パスワードを入力する。

現れる、ランドセルを背負つた少女 まだあどけない小学生の由香里。

なんて可愛い俺の妻。

俺は保存してあつた画像を表示していく。

友達と遊ぶ由香里、スクール水着の由香里、運動会、セーラー服、合唱コンクール、卒業式、受験、学園祭、遠足に修学旅行、笑う由香里、落ち込む由香里、初めて・・・初めて俺と繋がった日の由香里。

可愛い由香里から綺麗な由香里まで沢山の由香里。

由里子の写真が無くなってしまったのは少し残念に思うが、写真なんていいくらでも撮れる。

由香里と由香里の中の由里子と俺との写真が。

デジカメからパソコンにデータを移し、俺は寝室に戻る。ベッドの中に潜り込むと由香里が薄く目を開けた。

「あなた・・・?」

抱きしめると微笑み、再び眠る無防備な由香里。  
ああ、俺が守るよ。

愛してる。由香里、由里子。

俺は由香里の温もりを感じながら目を閉じた。

## 夫最終話（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

お気に入り登録・評価して下さった方々ありがとうございました。

俺には嫌いな奴がいる。

「もう帰るの？」

週末、血中から離れた街のアパートの一室で、女は訊いてきた。

「ああ」

身支度を整えて部屋を出る俺に、女は「またね」と手を振る。軽薄な笑顔。初対面の男と平気で寝る淫らな女。年齢を偽り一夜の相手を求めた俺にとつては好都合だったが……な。

溜息を吐き、星を見上げて歩く。目的は達成した。だが満たされない思いは何なのだろうか？

その答えは 出してはいけないような気もある。

虚しさだけが残る。

月曜日の教室、俺に挨拶する男。

「おはよう雅樹」

気紛れで話し掛けたやつたら俺を親友だと勝手に思い込んだ、馬鹿で単純で冴えない男。

お前を見ていると苛々する。俺の前から姿を消してくれ。

せつ思つのに、何故か俺の口は勝手に違つ言葉を紡ぎだす。

「おはよひ篤」

偽りの笑顔。親しげな態度。

違う、そうではない。

冗談のように篤に触れる俺の指。

そして週末、電車に乗つて訪れた街で、俺はまた偶然あの女と会つた。

「君つてさあ、高校生？」

問いかに無言で返す。

「ああ、やつぱそつ。別に高校生でもおじさんでも私は構わないけどね」

女は『由里子』という名前らしい。

すらりとした身体、小さな顔に大きな瞳、サバサバとした性格。そんなところが良くてそれからも数回身体を重ねたが、満たされぬ思いは続き、俺は街に行くのをやめた。

女を抱いても何も変わらない。

そして俺は眞面目に受験勉強をして、篤と同じ大学に合格した。

大学の構内、感じた視線。

振り向くとそこに由里子がいた。

「久し振り、この大学に入つたんだ」

まさか同じ大学の学生だったのか。てつきり社会人だと思つていた。人懐っこい笑顔は相変わらずだな。

「ねえ、これから……」

意味ありげに向けられた視線。そういう誘いだとは分かる。

伸ばされる指、艶やかな脣。

綺麗な女だ。だが魅力は感じない。

「悪いけどそんな気はないんだ」

踵を返して歩き出す俺を由里子は追いかけてきた。

「そう？ ジヤあ、また今度誘うわ」

その言葉通り由里子は時々俺を誘い、俺はそのたび断つた。「残念。結構相性がいいのにな」

悪戯っぽく笑い、去つて行く由里子。

彼女は俺の心を満たしてはくれないと分かつてゐるから、もう関係を持つことも無いだろう。

俺の心を満たすもの、それは……何だ？

偶然見た空の写真に惹かれ、中古のカメラを買う。夢中になれるものを探したいという思いもあつた。

だが俺が撮るものは……。

そんな時ふと気づく。篤の視線の先にいる人物。分かりやすい奴。

「気になるんだつたら、掛けみろよ

ばれてないとでも思つていたのか、篤は田を見開いた。

「見てるだけで、いいんだよ……」

俯いて咳く篤。ああ、そうだ。じつのはじりが嫌いだ。

「しようがねーな

つまんない、どうしようもない奴。

由里子の元に行つた俺は言つた。

「あいつと付き合つてくれないか?」

由里子は少しだけ田を見開き、そして笑つた。

「いいよ

あつさつとした返事。少し驚く。

俺は由里子が断ると思っていた。

「良かつたなあ。俺も嬉しいぞ」

良かつたのか? 嬉しいのか?

分からぬ、分からぬ。

「そうだ、写真撮つてやるよ

「いいよ、そんな

「遠慮するなよ。中西ーー ちょっと来いよー ほり並んで  
二人を並べて写真を撮つた。

順調な交際。軽いと思つていた由里子は意外にも眞面目に篤と付き合つていた。

これで良かつたのだろう。

一ヶ月後、二人は深い関係になり、俺は一人の幸せそうな写真を撮る。

そして一年後。

「チューしろ、チュー！」

俺のリクエストに恥ずかしそうに応える篠。

性格が少しだけ明るくなつた。それも 気に入らない。  
表面では笑いながら、心の中で毒づく。

一人と別れてアパートに戻り、酒を飲んで寝る。

その夜 、酔つた由里子がやつてきた。

「ああ、もうやつてらんない。やめやめ」

由里子の言葉に俺は驚いた。

「真面目な振りするのも疲れた」  
振り……。

「やだ、私が篠だけと寝てるって思つてたの？」

由里子はケラケラと笑い、俺に顔を近づける。  
「ねえ、興味ある？ 篠がどうやつて私を抱くか」

この女は何を言つている？

「篠が触れたこの身体に興味は無い？」

何故そんなことを訊く？ 俺はそんなものには興味など無い。

「あんた、篠を凄い目で見てるよね。……なんで？」

気がつけば俺は由里子を押し倒していた。

篠の大切なものを手に入れた感覺。 優越感。

それから俺は何度も由里子と関係を持った。

眠る篤の横で由里子を抱きながら、笑みが零れる。

妊娠したと告げられた。

俺の子じやないだろ？ だが由里子は俺の子だと言つ。一気に襲ってきた現実。どうすればいい？ どうしようもないだろ？ 自業自得か。

大学をやめた。一応義務があるから。

そして最後に 、一度だけのつもりで篤に会つた。

「あの女、ふざけやがつて。俺の子供かどうかなんて分かんねーだろ？ 色んな男とやりまくつてたくせに！ なのに俺の子供だつて言い張るんだぜ。あーあ、大学だつて後一年だつたのに、やめちまつたし。参つたな」

愚痴る俺。

なあ、好きな女寝取られて憎いだろ？ 言えよ、『お前が嫌いだ』つて。

そう、それなのに 。

「俺に譲ってくれ」

真剣な表情。馬鹿丸出し。

裏切つたんだぜ、由里子も俺も。信じられないお人よし。

俺は篤のそういう純粋なところが眩しくて、悔しくて、羨ましくて憧れて、だから 。

「お前の、そういうところが好きだ」

そして大嫌いだ。

生まれた子供に罪は無い、だが巻き込んだ。  
けじめをつけるためだけの結婚は上手くいく筈もない。由里子は  
育児を放棄した。俺は由里子に手をあげた。  
持てなかつた愛情、あるのは同情。子供は由里子の母に預けられ  
た。

いろんな人を傷つけて、まだ罵り合つ二人。  
形だけとはいえ何年も夫婦をやつていれば、由里子が欲するもの  
は分かる。

応えることが出来たなら、変わつていただろうか?  
やつれしていく姿に限界を感じた頃、由里子は言った。

「別れてあげる」

意地つ張りで　　嘘吐きな女。

最後に子供に会いに行こうと誘われて乗つた車。  
暫くして、行き先が違うことに気付く。

ああ、そうか。

妙に納得して、目を閉じる。  
スピードが上がり、一瞬の浮遊感。

ごめん。

誰に 対して な の か。

どうか 幸せ に。

『恋は脳の錯覚だ』

テレビの中、訳知り顔をしていつもともらしく言ひつ男。  
ああ、さうなの？ なんか納得。

高校生を拾つた。  
必死で大人ぶつてると「いろが可愛くて、家に連れて帰つていよい  
ろ教える。

「またね」

手を振ると眉を寄せられた。  
何その態度。変な子。でもちょっと面白い。  
また会えるかな？

「ろくでなしの馬鹿娘」

母は私をそう呼んだ。

うんまあ否定はしないけど、あなたの育て方にも問題があつたん  
じやないの？ 少しでも私に愛情くれた？ なんてね。  
ふらりと出かけ、今日のお相手を見つけた。

「ねえ、これからどう?」

私は、ろくでなし。

週末、高校生と再会。

すばり「高校生?」って訊くと、言葉に詰まつた。やっぱ可愛い。

「ねえ、名前は?」

少し迷つて、高校生は答えた。

「アツシ」

偽名かな?

それからも数回偶然会つて、そして『アツシ』は街に来なくなつた。

少し残念。連絡先を訊いておけば良かつた。

それからも変わらずだらけた生活を送り、でも時々あの高校生を思い出す。そんなある日。

大学の構内で、あの高校生と再会した。

「久し振り、この大学に入つたんだ」

声を掛けると、高校生　ああ、もう大学生か、は、目を見開い

て驚いた。

「ねえ、これから……」

「ちょっと遊ばない？ 以前みたいに。

「悪いけど、そんな気はないんだ」

しかしアツシは踵を返して歩き出す。あら、断られちゃった。私はアツシを追いかけて言つ。

「そう？ ジャあ、また今度誘つわ

それから私は、時々アツシを誘い、アツシはそのたび断つた。

「残念。結構相性がいいのにな」

ねえ、雅樹君。

やつぱり偽名だった。いつも一緒に居る子が『篠』で彼は『雅樹』。お互いがそう呼び合っていたから間違いないよね。そして、ある事実にも気付く。そんな矢先。

「あいつと付き合つてくれないか？」

雅樹に言われた言葉。私は少しだけ驚いて、笑つた。

「いいよ

「ちょっとだけ付き合つてあげる。

篠は大切な『オトモダチ』、なんでしょう？

「中西ー！ ちょっと来いよ！ ほら並んで」  
カメラを持つた雅樹が呼ぶ。私の苗字、知つてたんだ。  
篠と私を並べて、雅樹は写真を撮つた。

信じられないほど真面目な男、という篤の印象が変わったのは肉体関係を持つてから。

べつたりと引っ付かれて、予定を細かく聞かれて……はつきり言つてこれはきつい。束縛系だつたんだ、この男。

すぐに別れようかと思ったんだけど、雅樹が何度も写真を撮るから……だから関係は続く。気が付けば一年も経っていた。

「チューしろ、チュー！」

言葉ではそういうながら、雅樹の口は笑っていない。

篤の言葉に『結婚』の一文字が度々出て、束縛が激しくなる。

ああ、もう限界。

私は雅樹の部屋へと行った。

「ああ、もうやつてらんない。やめやめ。真面目な振りするのも疲れた」

そう言つ私に雅樹は驚く。

「やだ、私が篤だけと寝てるつて思つてたの？」

そうよ、ここ最近は篤だけ。馬鹿みたいに束縛してくるから、他の男と遊ぶ隙も無い。

私は雅樹に顔を近づける。

「ねえ、興味ある？ 篤がどうやって私を抱くか  
雅樹が目を見開く。

「篤が触れたこの身体に興味は無い？」  
あるでしょ？ だって。

「あんた、篤を凄い目で見てるよね。……なんで？」

雅樹は私を押し倒した。

それから雅樹は何度も私と関係を持った。

眠る篤の横でも私を抱いた。泣きそつた顔で。

妊娠が分かった時、意外にも私は冷静だった。そして雅樹の子だと確信した。

雅樹は青ざめ、『違う』と言いながらも、結局は子供のために大学を辞めた。

篤はそれでも結婚してほしいと私に言つてきたけど、無理に決まつてるでしょ？ 私はあんたから解放されて嬉しいの。でも……嫌いではなかつた。

二つかあなたの束縛に耐えられる女が現れるといいわね。

田の前には泣き叫ぶ子供。私は何をしているのだろう？

雅樹は私に手を上げた。私は子供に手を上げた。

『ごめんなさい、ごめんなさい。

罪悪感、愛おしさ。私は外へと逃げた。

繫ぎとめることが出来る筈だった。それなのに、どうして私を見ないのだろう。何をすれば良かったのだろう。

私は いつから雅樹を好きになっていたのだろう。

酒を飲み、見知らぬ相手に抱かれて帰ってきた朝、目の前に転がる、傷ついた小さな存在を抱きしめる。

こんなことがしたいわけじゃない。お願い誰か、助けて、助けて、助けて……！

気が付けば、実家に居た。突然の訪問に驚く母に、強引に子供を押し付けた。

「捨てるのか？」

罵倒を浴びせられながら、私は立ち去る。

何をしても、手に入れられないものはある。それを悟った時、こみ上げてくる笑いを止められなかつた。

「別れてあげる。でも最後に、一緒に子供に会いに行こう」

嘘を吐き、助手席に雅樹を乗せて走り出す。

何もかも、無かつたことにしよう。私から雅樹への気持ちも、雅樹から篤への気持ちも。

アクセルを限界まで踏み込む。

愛情、憧れ、欲望、嫉妬 すべて錯覚。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2689m/>

---

錯覚

2011年10月17日23時38分発行